

史跡石動山行者堂の移築復原

建造物研究室

石動山は石川県鹿島町に所在する修験道の山である。その草創は8世紀に遡り、中世では360坊、近世でも58坊の寺々が講堂を中心とする大伽藍とともに一山を形成していた。創建以来幾度となく羅刹したが、最後の大きな被害は天正10年の前田利家による攻撃で、この時山内のすべての建物が焼失した。その後北陸の雄藩となった同氏の援助もあって17世紀初頭から18世紀にかけて順次復興していったが、五重塔・多宝塔などのように再建されない建物もあった。

今回旧地に移築復原した行者堂は、17世紀中頃の古材を一部活用しながら18世紀の極初めに建てられたと考えられるもので、石動山が明治新政府の方針によって瓦解した際、他の建物とともに売払われた一つで、西麓の最勝講村が金19円也で入手し、天神社拝殿として再利用していた。ところが近年になって拝殿が新築されることになった機会に町が寄贈を受け、昭和53年から継続している史跡整備事業の一環として往昔の地に里帰りさせ、史跡の保存と活用に資することとなったのである。ちなみに、現在山上には江戸時代の建物として、旧大御前本社（現伊須流岐比古神社本殿 1653）・旧神輿堂（現同社拝殿 1701）・旧觀坊（17世紀中期）があり、また山下に移築の旧仁王門（現鹿西町長樂寺仁王門 18世紀初）・旧開山堂（現氷見市道神社拝殿 1801）がのこっている。

天神社拝殿に転用された際、柱位置を移動するなどして改造を加えている部分があったので今回の移築を機に次のように旧形式に復原した。1. 正面三間側面三間入母屋造妻入りを桁行三間梁間二間入母屋造平入りに改め、原地の旧礎石上に移築する。2. 栓瓦葺を銅板葺（こけら葺形式）に改める。3. 妻飾りを両側面とも木連格子に復する。4. 背面側円柱を旧位置にもどし仏壇構えを復する。5. 原地縁束石によって正面および両側面に縁を復する。

このように、礎石群として存在していた遺跡と、実際の建物とを合体復原した例は少なく、今後の史跡整備の一つの手法を示すものとしてその意義は大きいと考えられる。なお、1990年3月に工事報告書が刊行された。

（細見啓三）

竣工行者堂全景

行者堂復原平面図